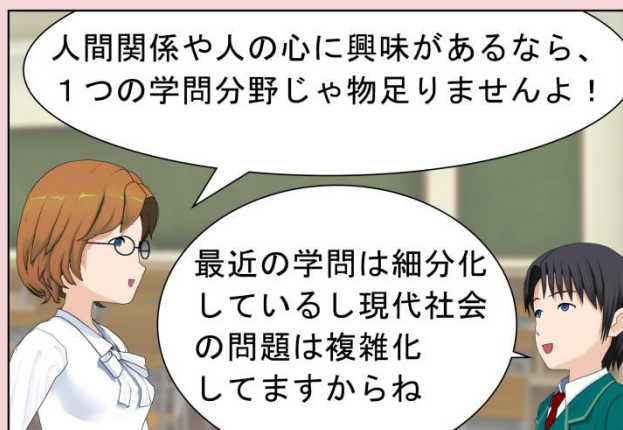


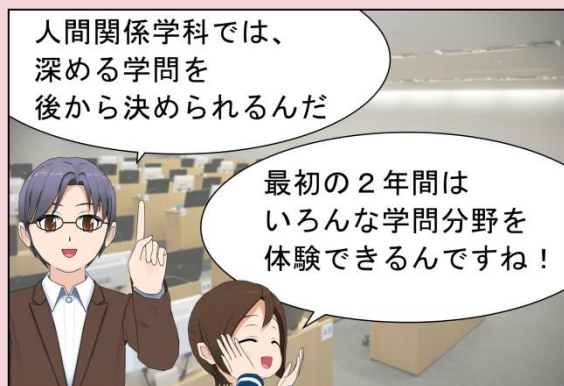
「〇〇な人」は人間関係学科が向いています！

「人間って不思議だなあ」と時々考える人！

※「〇〇学」という1つの学問しか学べないのでは物足りないし、視野が狭くなってしまおう！という声にこたえて、人間関係学科では、教育学、人類学、心理学、社会学、環境学、福祉学、健康スポーツなどの学問を学ぶカリキュラムとなっています。例えば、人の心を人類学的に見たり、教育の営みを心理学的に見たり、福祉の行為を健康科学的に見たりできるのです。そのような学問的な広がりや響き合いは「多学問学科」ならではの。



やりたい学問が1つに決まらない人！



※1～2年次に概論や基礎演習などを通じて多くの学問分野を学びます。3～4年次に1つの分野について専門性を深化させ、4年間の集大成として全員が卒業論文を書くことができます。入学後にいろいろな学問に興味に移ることはもちろん、「その学問を学んでみたらイメージと違った」「向いてないかも…」ということも多いですが、人間関係学科なら安心です。

就職が心配な人！



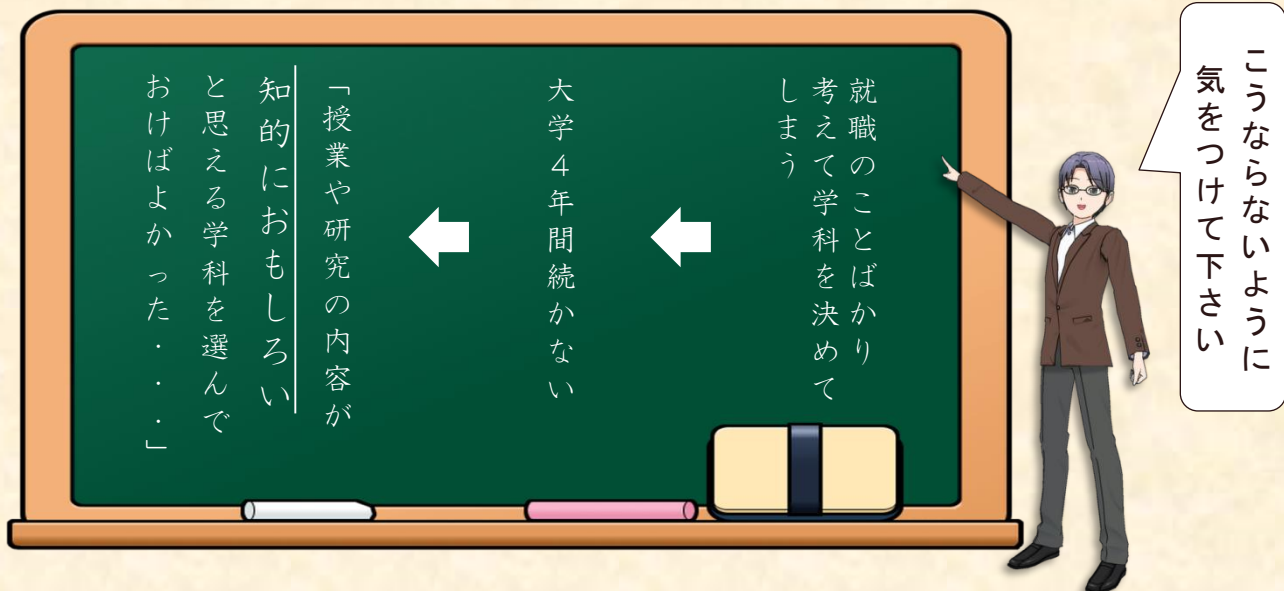
※例えば、教育学が役立つのは学校場面だけではなくありません。職場では後輩や部下の指導に関わるでしょう。最近の企業経営にはエコロジーの観点が必要ですが、そこに環境学の知見が役立つはずですよ。商品開発のために世の中の流行を理解するには社会学が重要です。営業や販売で人を説得するのに心理学が関連し、社員の福利厚生や働きがいを考えるうえで福祉学の視点は欠かせません。



文学部オリジナルサイト
←



北九州市立大学は公立の総合大学です
裏面は人間関係学科の学びの内容を具体的に →



北九州市立大学 人間関係学科では、例えばこんな研究をしています

私たちは気に入ったものなどに思わず「カワイイ♥」という言葉を発します。一方で、自分が誰かから「かわいい」と言われたいかを聞いてみると男子と女子とでは答えが異なります。女子のほうが男子よりこの言葉に好意的であり、受容的ですし、日常的にもよく使っています。

日本の女子は“かわいい”をコミュニケーションの手段として進化させたと考える研究者もいます。自分が何者であるか、育った環境の違い、勉強ができる・できないなどとは関係なく、かわいいモードで話を始めると、何も考えなくても自然にコミュニケーションが広がるというのです。どうやら“かわいい”は、とりわけ女子にとっては、おしゃべりによって共感と親密さを求めるうえで重要なキーワードになっているようです。

「家族」は歴史や文化を越えて私たちに最も身近で必要不可欠な共同体です。同時に、家族は地域の経済・政治・文化によって様々に変化してきました。家族を見れば、私たちと社会との関係のあり方が手に取るように理解できます。

例えば、現代家族、中でもその「離婚」という現象を見てみましょう。離婚の増加は、果たしてカップルの相性や性格の問題だけなのでしょうか。離婚は子どもに悪影響だと言いますが、そうではない離婚、それを支える意識や制度変化もたくさん見つかるのではないのでしょうか。このように、身近な家族を取り巻く実態を冷静に観察することから、複雑で不思議な現代社会の記述が始まります。

「ネコ好き」な人と「イヌ好き」な人は何が違うのでしょうか？調べてみると、ネコのように自由奔放な性格の人は「ネコの性格が好き」なようです。自分と似ているからだと思われます。しかし、イヌのように人の言うことをよくきく性格の人は、「イヌの性格が好き」という傾向は特にないようです。また、人前での性格はそこそこ明るく話し好きでも、家に帰って一人になると内向的になるという変化の大きい人は、「ネコを飼いたい」という人が多いようです。一方、「イヌを飼いたい」という人は、人前と一人での性格の変化はあまりありません。

ネコブームになる社会というのは、人前と一人での性格を変えなくてはいけないというストレスが大きい社会なのかもしれません。

北九州市立大学は公立の総合大学です